『メー・ティ』における言語批判
—ブレヒトの „Wendungen“—

Die Sprachkritik im „Me-ti“
—Die „Wendungen“ Bertolt Brechts—

木 村 英 二
Eiji Kimura

Erkenntnistheorie muß vor allem Sprachkritik sein.[1)]
「認識論は何よりも言語批判でなければならない。」

ブレヒト（Bertolt Brecht）は1942年2月1日、『仕事日誌』*Arbeitsjournal*の中で、中国の漢字に対する興味について述べるとともに、自分でもいくつかの文字を発明している。その「文字の表」（Katalog der Charaktere）に続いて次のような記述がなされている。

「いろいろな人に尋ねながら、社会的な文字（eine soziale Schrift）を作り出せるかもしれない。『転機の書』 *Buch der Wendungen*の中で、文字についての話し合いは、すぐれた一章を提供してくれるだろう。」[2)]

ここで取り上げられている「文字」は、結局『転機の書』の一章を形成することはなく、『亡命者の対話』 *Flüchtlingsgespräche* の付録、「ツィフェルーカレ文字」（Ziffel-und Kallenschrift）として残されることになった。この文字に冠せられた「社会的」という形容詞が明確に示しているように、ブレヒトはある種の言葉のあまりにも一般化された非社会的な性格に苛立ちを覚えていた。これは、それに対抗する、彼の言う「社会的な身振り」を内包した文字と言ってもいいだろう。この試みは、ブレヒトの言語批判の延長線上にあるものである。[3)] 表音文字であるアルファベット文化を背景としたヨーロッパ人ブレヒトが、言葉、概念の持つ同一化作用に対する批判の一つの帰結として、「中国ふうの象形文字」という表意文字の案出にまで至ったのは興味深い事実である。もっとも、このような試みは頓挫し、断片にとどまり、基本的にはブレヒトは、同じ意図をもって別の形で言語批判を行った。言語批判は言語そのものを問題にするかぎり、システムの内部にとどまりながらそのシステムを批判し、突き崩すという作業を続けざるを得ないのである。

I

Me-ti/Buch der Wendungen の成立時期は、これまでのところ完全には確定されていないが、ちょうど『亡命者の対話』の場合と同じく亡命のかなりの期間を占めている。ブレヒトが読んだ『墨子』は、アルフレート・フォルケ（Alfred Forke）による『墨子　社会倫理家

平成元年4月8日原稿受理
大阪産業大学　教養部

とその弟子の哲学的著作』*Mê Ti des Sozialethikers und seiner Schüler philosophische Werke*（ベルリン1922年）である。彼はすでに20年代末にはそれを読んでいたようである。ハンス・アイスラー（Hanns Eisler）の記憶によると、中国哲学が、「思考の刺激」として1929、30年頃、ブレヒトに影響を与えていた。[4] 1935年3月か4月のモスクワからのヘレーネ・ヴァイゲル（Helene Weigel）宛の手紙では、自分の所有していた『墨子』を製本屋に出したことが分かる。[5] また1936年末ないし37年初めのカール・コルシュ（Karl Korsch）宛手紙では次のように書いている。

「私は、すでにあなたに一部をお見せした中国風に書かれた振る舞いの学についての本（das in chinesischem Stil geschriebene Büchlein mit Verhaltungslehren）を書き続けるつもりです。その資料に目を通していたら、同封しました文章が、また見つかりました。これらは非常に有益なものであり、あなたに続きを書いていただきたいのです。モンタージュ風のものでも、コンテクストから切り離されたものでも、とぎれとぎれのものでも構いません。いくつか書いて送ってくれませんか。全くのスケッチでも、学問的保証のないものでも構いません。お分かりでしょう。資料にしたいのです。」[6]

ブレヒトは、この少し前頃から、つまり、*Büchlein mit Verhaltenslehren* と *Buch der Wendungen* という二つの仮題（Arbeitstitel）を使用し始める時期である1934、5年頃[7]から、作品に本格的に取り組み始めたと推測される。また、この手紙から作品に対するコルシュの影響を指摘し、それをテーマとして取り上げることもできよう。[8] 特に我々のテーマとの関連で見れば、「モンタージュ」（montiert）、「コンテクストから切り離されたもの」（aus dem Zusammenhang gerissen）、「スケッチ」（skizziert）という一連の言葉は、ブレヒトの思考のスタイルとこの作品の様式を示唆するものとして注目したい。その後、ブレヒトはスターリン裁判や第二次世界大戦という現代史上の事件についても思考の痕跡を残し、42年の、あの引用に達することになる。

さて、この未完に終わった作品が公表されたのは、1965年のことである。ブレヒトアルヒーフの資料をもとに「ウーヴェ・ヨーンゾン（Uwe Johnson）は――最初の編集者として理に適ったことであったが――遺稿が示している資料の配列に従った。」[9] 二年後、ズールカンプ版の全集（Werkausgabe in 20 Bänden）の編集者、クラウス・フェルカー（Klaus Völker）も、他の作品に属すべきテクスト等を考慮して、一部を新しく編成しながらも、全体としてはヨーンゾンのお手本に従った。[10]

ところが、1975年になって、これとは全く違った編集を行ったのが、ヴェルナー・ミッテンツヴァイ（Werner Mittenzwei）である。彼は、

「新しい編集は『メー・ティ』構想全体の内的秩序（die innere Ordnung）や構成原理（das kompositorische Prinzip）を明確にし、この本に示されている思考文化（Denkkultur）をはっきりさせなければならない」[11]

と考えて、現在の資料を五つの新しい「書」（Bücher）に編成し直した。それらは彼によれ

ば、次のタイトルと関連を持っていると言うことになる。[12)]

1．『偉大な方法』*Große Methode*
2．『経験の書』*Buch der Erfahrungen*
3．『大無秩序の書』*Buch über die Unordnung*
4．『変革の書』*Buch der Umwälzung*
5．『偉大な秩序』*Große Ordnung*

「『偉大な方法』(1) は階級社会の経験と闘争から発展した。(2) この方法は無秩序のシステムを倒すために用いられる。(3) 『変革の書』(4) は、またこの社会に偉大な秩序 (5) を実現せんとする革命闘争における条件と態度を取り上げる。」

すでに何人かの研究者が指摘している[13)]ように、ミッテンツヴァイの、あまりにも明白な矛盾のない発展の原理に基づくこのような構造付与 (Strukturierung) は恣意的なものに過ぎない。この作品の形式の多様性、アフォリズム的性格は、決して整合的な「内的秩序や構成原理」を指向するものではない。断稿で終わったものであっても何らかの作品としての構造を追究することは必要であるが、それは決して「外から」持ち込まれたものによって実現されるのではなく、テクストそのものの持つ構造から出発しなければならない。後で考察するように、この作品は、むしろこのような全体志向、統一性、秩序志向を繰り返し批判する言説から成り立っているのである。

II

『メー・ティ』に付け加えられたタイトル *Buch der Wendungen* は、この作品の基本的構造と性格を考える際のヒントを与えてくれる。Wendungen という言葉は先ず「社会的現象における弁証法」と解される。それを言わばプログラムとして表しているのが、『変化について』*Über Wendungen* という作品である。

「ミー・エン・レーは教えた。民主主義の導入は独裁の導入に通じるかもしれない。独裁の導入は民主主義の導入に通じるかもしれない。」[14)]

この、すでにしばしば指摘されている側面とともに、Wendungen には言葉、概念の「転換」、それによる言語システムの「転換」という意味も含まれていると考えられる。構想の中には『概念の訂正』*Richtigstellung der Begriffe* という作品のタイトルも見られる[15)]が、実際ブレヒトは『メー・ティ』において、個々の言葉、とりわけナチスドイツにおいて特別のコノテーションを持った概念や美徳について「概念の転換」を行おうとしているのである。それは、概念が持っている見せかけの同一性に対する差異化の試みである。

これら二つの大きな認識論的「方法」とともに、Wendungen はさらに内容に関わる意味が含まれている。先ずそれは「言い回し、表現」という意味を持っている。『メー・ティ』全体を見れば、まさにこの「言い回し、表現」というのは、大きな要素であり、こういう意

味での Wendungen の書と言える。しかしさらに、これ以外に、より基本的な包括的な意味が潜んでいるのではないだろうか。*Buch der Wendungen* が、*Büchlein mit Verhaltenslehren* というもう一つのタイトルとパラレルに用いられていること、また作品中でも、ブレヒト自身を表すキン・イェー（Kin-jeh）が„ ein Lehrbuch des Verhaltens "を書いたと言う記述がある[16]ことを考えれば、二つの題は同じ意味を共有しているのではないか、すなわち Wendungen が「行動、振る舞い」の意味を持っているのではないかと推測される。実際、現代においては一般的ではないが、グリム（Jacob und Wilhelm Grimm）の辞書には、「ある特定の態度（特に精神的な振る舞い方）」という Wendungen の意味が載っている。[17]そしてその際に用例として挙がっているのが、次の『西東詩集』*Der Westöstlicher Divan*に関するゲーテ（Johann Wolfgang Goethe）の言葉である。

> Das *Buch der Betrachtung* ist praktischer Moral und Lebensklugheit gewidmet, orientarischer Sitte und Wendung gemäß. [18]
> 「『観察の書』は東方の習わしと振る舞い方にかなった実際的な道徳と人生経験に捧げられている。」

この引用と『メー・ティ』の内容上の類似性や「……の書」という両作品のタイトルを考えれば、この箇所の直接的な受容も十分考えられる。ゲーテが14世紀のペルシア詩人ハフィス（Hafis）に倣いながら、東洋を歌うことによってドイツを歌い、過去を歌うことによって現代を歌おうとしたように、ブレヒトは、紀元前５世紀ごろの「戦国時代」の「社会倫理家」墨子の思想を自らの思考の刺激として用い、現代という危機の状況における非常に広い意味での人間の行動、振る舞い（Verhalten）についてのアフォリズムを書き綴ったのである。

Ⅲ

「メー・ティは教えた。思考は人間の人間に対する振る舞い（Verhalten）である。」[19]「思考」（Denken）もまた、「振る舞い」の一つである。ブレヒトは、「思考」と「思想」（Gedanke）を明確に区別している。そしてまた「哲学すること」（Philosophieren）と「哲学」（Philosophie）という言葉も、しばしば差異を意識しながら用いている。『メー・ティ』の第二番目の話のタイトルは、『様々な哲学のやり方』*Über verschiedene Arten des Philosophierens* となっている。ここでは実際的な性格を持った「哲学すること」の例が挙げられているが、特に結末の部分が興味深い。

> 「[……]その人々のところでは町や同業組合、仕事場や船などの話はされなかったが、それでも彼らは考えながら町をつくり船に人を乗せたり、あるいは町をつくり船に人を乗せながら考えることができたのである。船や町がいろいろな思想（die Gedanken）の中に現れないこと、それは思考が離れやすいものであること（Das Denken löst sich leicht los.）を示している。それが思考の特性である。」[20]

ここで対立するものとして把握されているのが、「思考」と「思想」である。「思想」とは、システムのことであると解せられる。これに続く第三の話は、『思想の王国について』*Über das Reich der Gedanken* である。

「ある種の秩序付ける思想（gewisse Gedanken ordnender Art)、さまざまな思想のあいだの秩序を作り出す思想は、その振る舞い（Verhalten）が官吏とそっくりである。それらはもともと公共に仕えるものとして置かれているのだが、まもなくその主人になってしまうのである。それらは生産を可能にすべきものなのに、それらを呑み込んでしまうのである。」[21)]

ブレヒトは、このような思想が支配する国を「思想の王国」（das Reich der Gedanken）と呼んでいる。そこでは、「最もひどい抑圧が支配し」、「抑圧以外の秩序は存在しない。」また、「反抗的な思想の結集が容赦無く妨害される」のである。この王国というのを全くの比喩と考える必要もないが、それが資本主義やファシズムの支配する国を指しているのか、あるいは当時のスターリン体制下のソ連を指すのかという議論もあまり意味がないように思われる。この権威、秩序、抑圧と結びつき、同一性を志向し、差異を拒む思想とは、あの多層的、多面的なロゴス中心主義、形而上学合理主義のことである。それは、また権力に奉仕するとともに自ら力となって、政治的絶対主義の基盤になるのである。

「ある種の思想は、もっぱらこの国を永遠のものと宣言するために置かれている。それらは日夜、この国が自然の一部であり、不変のものであると証明している。」[22)]

つまり、この「思想の王国」とは、言語システム、思想の体系であると同時に政治的システムでもあるのである。それを根底において支えているのが、種々の領域、様々なレベルでの同一性原理[23)]である。ブレヒトは、言わば一つの宣言として次のように表明している。それは、上に挙げた「思想」に対抗する彼の「振る舞い」なのである。

「私は一は一であると考えることができる。また一は一でないと考えることができる。後者のように考える方が都合がよい、つまり、私が一定のやり方で行動しなければならないときはそうである、と言えば十分ではないでしょうか。」[24)]

思考とは、そもそも同一性原理を拒み、それからすり抜けようとする非同一的なものとの対話であり対決であると言えるかもしれない。ブレヒトは、『コイナさん談義』*Geschichten vom Herrn Keuner* の中の『システムについて』*Über Systeme* という話で、次のように書いている。

「『多くの誤りは、』とK氏は言った。『演説している人々の話をさえぎらないか、それともほんの少ししかさえぎらないことによって生じるのです。こうして簡単に虚偽の全体（ein trügerisches Ganzes）が出来てしまうのです。これは、まとまっているので誰も疑

うことはできないし、個々の部分が調和しているように見えますが、実際は個々の部分は、ただ全体に対してのみ調和しているのです。』」[25]

「虚偽の全体」とは、非同一的なものを捨象して構築された思想の建物、閉じられた体系を言い表している。この箇所においても示唆されているが、この「虚偽の全体」を破壊するためには、先ず「さえぎる」ことが必要である。『メー・ティ』の中にも『システムの取り扱い』*Behandlung von Systemen* という文章がある。

「哲学者はたいてい、自分の文章がコンテクストから切り離されると気分を害する。メー・ティはそれをすすめたのである。彼は言った。『システムの文章は犯罪者集団の一員のように頼りにしあっている。個別になら、それらをうち負かしやすい。つまり、それらを切り離さなければならない。それらを認識するためには、それらを個別に現実につき合わさなければならない。』」[26]

この認識から、ブレヒトの方法論的手続きの一つが成立するのであるが、それは、次章で詳しく考察したい。

以上見てきたブレヒトの思考のスタイルは、同一性原理、システム、全体性に対する批判と要約することができる。メー・ティは、「よい武器になりうるが、あまり長く保持できない」、「雪合戦のボールに似た類の認識」を最良のものだと言う。[27] そして、「あまりにも完全な世界像の構築」(das Konstruieren zu vollständiger Weltbilder)に反対する。[28] そのような思考に相応するのは、決してミッテンツヴァイの意図する整合的な「内的秩序や構成原理」ではなく、現在残っているアフォリズム的性格を持つ『メー・ティ』である。上の引用の「コンテクストから切り離す」(aus dem Zusammenhang reißen) という言葉は、ちょうど、あのコルシュ宛の手紙にも見られる表現であった。哲学的なものであれ、文学的なものであれ、ある言説が整合的なものであればあるほど、システマティックで、統合的な構造を持つ。それは、また権力を志向するものともなりやすいのである。アドルノ(Theodor W. Adorno) は、『形式としてのエッセイ』*Der Essay als Form* の中で、エッセイを非同一性を表現の眼目にする形式として捉え、次のように述べているが、それは、ここの我々の作品の構造にも当てはまる。

「隙間のない概念秩序であっても、存在するものと同一ではないのだから、エッセイは、帰納的にせよ演繹的にせよ、閉じられた構造 (geschlossener Aufbau) を志向したりしない。エッセイは、とりわけ変わりゆくもの、一時的なものは哲学には相応しくないというプラトン以来根を下ろしてきた教義に反抗する [……]」[29]

Ⅳ

すでに述べたように、メー・ティの「話をさえぎる」、「コンテクストから切り離す」という行為は、システムの同一化に対抗する「振る舞い」であった。それは、もちろんブレヒト自身

の方法でもある。彼は『真実の再構成について』*Über die Wiederherstellung der Wahrheit* において、その具体的手続きについて書いている。

「欺かれることが要求され、思い違いが促進される時代には、考える人は自分が読んだり、聞いたりすることをすべて訂正しようと努力する。彼は読んだり、聞いたりすることを小声で口にし、口にしながらそれを訂正する。文を一句一句たどりながら、彼は本当でない発言を本当の発言と置き換える。彼は、もう他の読み方、聞き方ができなくなるまで、そうするのである。[……] 考える人がこのようにするのは、欺かれたり、思い違いをさせられていることを確認するためだけではない。彼は欺瞞や思い違いのしかたを把握したいと願っているのである。『強い国民は弱い国民ほど簡単には攻撃されない』という文を彼が読むとき、『しかし、より簡単に攻撃する』と付け加えれば、その文を訂正する必要はなくなる。」[30]

このエッセイでも、「コンテクストは文にしばしば、見せかけの正しさ（Anschein von Richtigkeit）を付与する」ことが明確に指摘されている。『メー・ティ』の『ペンキ屋の名言』*Aussprüche des Anstreichers* で書かれているように、「ペンキ屋」ヒトラーの「公益は私益に優先する」（Gemeinnutz geht vor Eigennutz）というスローガンも多くの人に「新時代」の始まりと思わせる、「すばらしい見かけ」（ein prächtiges Aussehen）を持っていた[31]。このようにシステムが保持している「虚偽の全体」、「見せかけの正しさ」、「すばらしい見かけ」といったものに対して、ブレヒトは先ず、レーニンの「誰が、誰を」（Wer？ Wen？）という問いを投げかけることによってテクストを相対化しようとする。上の「強い国民は……」の直後には、次の文が続く。

「彼〔＝考える人〕は、戦争が必要だと聞けば、どのような状況で（unter welchen Umständen）、また誰にとって（für wen）なのか、と付け加える。」[32]

これは、決してシステムの外側から別のシステムを対置したり、テクスト全体を変えようとするのではなく、「犯罪者集団のように頼りにしあっている」システムの文章に楔を打ち込み、そのひび割れからシステムを破壊しようとする行為である。

『メー・ティ』の中には、『概念のカタログ』*Katalog der Begriffe* というタイトルを冠した文章が二つあるが、そこでは、特に「欺かれることが要求され、思い違いが促進される時代」に独特の意味を持っていた概念が扱われている。

「ヒトラーは土（*Boden*）という概念をたえず神秘的な意味（in einem mystischen Sinn）で用いた。彼は血と土（*Blut* und *Boden*）という表現を行い、国民がそこから引き出すべき秘密の力（geheime Kräfte）を暗示した。メー・ティは土のかわりに土地（*Grundbesitz*）という言葉を用いたり、その言葉を「実り多い」（furchtbar）、「干からびた」（dürr）、「水の乏しい」（wasserarm）、「腐食質の」（humushalting）というような形容詞を付して用いることをすすめた。」[33]

形容詞を付けるというのも、Wer？Wen？という問いかけ、条件づけとともに、またひとつの相対化の機能を持っている。『メー・ティ』の最後には、一連のライ・トゥーの話（Lai-tu-Geschichten）が含まれているが、その中に、『大きすぎる言葉の回避』*Vermeidung zu groBer Wörter* というタイトルが見られる。[34] そこでは、ライ・トゥー（ルート・ベルラウ）との個人的関係が背景になっているのだが、一般的で曖昧な言葉、そして大げさな言説の批判という基本的構造は、今引用したテクストと共通している。さらに、ここでは大きすぎる「価値」を持った言葉に形容詞を付して意味を限定、明確にするだけでなく、別の言葉による言い換えも問題になっている。それは、「土」（Boden）という言葉が、「大きすぎる」だけでなく、ナチスによって独特のコノテーションを付与されているからである。それを言い表しているのが、「神秘的な意味」とか「秘密の力」という表現である。また『真実を書く際の五つの困難』*Fünf Schwierigkeiten beim Schreiben* [35] や『亡命者の対話』[36] におけるのと同様に、ここでも Volk という概念が取り上げられている。[37] 批判の構造は Boden のばあいと同じである。メー・ティは、この言葉の使用に対して、「極度に用心すること」をすすめる。また彼は、他の国民や政府に対してこの言葉を口にするのは差し支えないと述べているが、この「～に対して」（im Gegensatz zu～）というのは、差異を明確にするということである。しかし、ふつうは Volk のかわりに Bevölkerung という言い方をすることが提案されている。それは、「Volk という言葉が有しているかのように思わせている人工的な統一性をもっていない」[38] からである。この「人工的な統一性」（das künstlich Eigentliche）という表現は、概念の持つ同一化作用を見事に表している。

ブレヒトは、このような手続きの先達として孔子（Konfuze）の名まえを挙げている。それによれば孔子は、古い、愛国的な年代記の「ある種の言葉だけを変えることによって」、「新しい歴史の判断に道を開いた」のである。[39] そして、このような方法について『メー・ティ』の中でも『言い換えの利益』*Nutzen der Umbenennung* というタイトルを与えて、論じている。

> 「ニー（日本）の将校が侵略戦争に反対だった一群の政治家を殺したとき、新聞は彼らを行動家（Aktivisten）と呼び、犯人（Täter）とは言わなかった。行動家とは行動を愛する人々のことである。こうして新聞は、読者がその行為について判断するのではなく、ただ話をするのと行動に移すのではどちらがよいのかを判断するようにしむけたのである。」[40]

ここで問題になっているのは、支配側のイデオロギー操作であるが、それに対抗する側は、「行動家」という呼称が指すものが実は「犯人」であることを見抜いて、それを再び「犯人」と言い換えなければならないのである。そのような言い換えは、ある特定の意図をもった一般化に対して、差異化のための分節線を引く行為である。

以上、ブレヒトの言語批判の具体的な例を見てきたが、タイトル自体にそのまま現れた「大きすぎる言葉の回避」、「言い換え」、「概念の訂正」という言葉は、その方法を如実に表している。

「彼のしごとの方法は言葉の魔術（Wortzauber）と紙一重である。言葉を変えることによって彼は変化した現実を誘き寄せようとしているように見える。実際、概念に関わることは今後の実践のために道を開く可能性を持っている。」[41)]

言語批判は、決して非社会的なものではない。ブレヒトは、言語が決して中立的な鏡や無作用的な伝達道具ではなく特定の現実の中で構築された構築物（Konstrukt）であることを、洞察していた。また、彼は、デノテーションだけでなくコノテーションも含めて言葉の持つ力、現実を写すだけでなく、現実を歪曲し、操作、支配する力、また現実を形成し、変革する可能性について強く意識していた。多くの場合、社会批判は、支配的イデオロギーの概念的下部構造に手を触れずに、「外部から」攻撃しようとするが、ブレヒトの言語批判の攻撃目標は、たいてい、他ならぬこの下部構造である。ある事象にどのような Wendungen（変化）を認めるか、そしてそれにどのような Wendungen（表現）を用いるか、いまある表現に対してどのような Wendungen（転換）を施すか、それら全てを含み込むのが、まさに Wendungen なのである。ブレヒトの言語批判は、冒頭に挙げたように、文字のレベルにまで達する彼の「社会的」な「振る舞い」なのである。

注

ブレヒトのテクストは下記を用い、注においては巻数とページ数だけを示す。（例：14, S. 1500）
Bertolt Brecht: Gesammelte Werke in 20 Bänden. Frankfurt am Main 1967.

1） 20, S. 140.
2） Bertolt Brecht: Arbeitsjournal. 2 Bände und ein Anmerkungsband. Frankfurt am Main 1973. Bd. 1, S. 369.
3） 拙稿「ブレヒトにおける『アインデンティティ』の問題」『大阪産業大学論集』大学開学20周年記念号 人文科学編　1985年　112ページ以下参照。
4） Vgl. 12. Anmerkungen, S. 1.
5） Vgl. Bertolt Brecht: Briefe. 1 Band und ein Anmerkungsband. Frankfurt am Main 1981, S. 248.
6） Ibid., S. 301.
7） Vgl. zum „Büchlein mit Verhaltenslehren" 12. Anmerkungen, S. 1. また、この注では„Buch der Wendungen"という標題が最初に現れたのは、1939年5月とされているが、実際は1935年頃であることが分かっている。（Brecht-Archiv Mappe 13035.）
8） Vgl. z. B. Klaus-Detlef Müller: Brechts *Me-ti* und die Auseinandersetzung mit dem Lehrer Karl Korsch. In: Brecht-Jahrbuch 1977. Frankfurt am Main 1977.
9） Jan Knopf: Brecht-Handbuch. Lyrik, Prosa, Schriften. Stuttgart 1984, S. 448.
10） Ibid., S. 448f.
11） Werner Mittenzwei (hrsg.): Me-ti. Buch der Wendungen. Prosa, Band 4. Berlin und Weimar 1975, S. 236. (Nachwort von Werner Mittenzwei)
12） Vgl. ibid.
13） Vgl. z. B. Jan Knopf: a. a. O., S. 449.
14） 12, S. 434.
15） Vgl. z. B. Klaus-Detlef Muller: Brecht-Kommentar zur erzalenden Prosa. Munchen 1980, S. 215.
16） Vgl. 12, S. 472.
17） Vgl. Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm in 33 Bänden. Bd. 28, S. 1823.
18） Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke in 18 Bänden. Artemis-Ausgabe. Bd. 3, S. 765.

19) 12, S. 431.

20) 12, S. 422.

21) 12, S. 423.

22) Ibid.

23) 私は、前掲の拙稿において、ブレヒトが原則的には同じ「弁証法」のカテゴリーで捉えている『メー・ティ』の「農民は農民だ」(Bauer ist Bauer) と「木は木だ」(Holz ist Holz) という二つの同一律が、実は異った性格を持っているのではないか、という指摘を行った。つまり、前者では通時的な弁証法的変化と相対的な同一性の保持が、後者では共時的な構造論的差異が問題になっているのである。
この後者のタイプの同一性批判は、これまでブレヒト研究の中でほとんど論じられることがなかったが、実際は彼の思考において重要な役割を果たしている。拙稿　前掲論文 98ページ以下参照。

24) 20, S. 152.

25) 12, S. 414.

26) 12, S. 471f.

27) Vgl. 12, S. 452.

28) Vgl. 12, S. 463.

29) Theodor W. Adorno: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Frankfurt am Main 1973. Bd. 11, S. 17.

30) 20, S. 191.

31) Vgl. 12, S. 441f.

32) 20, S. 191.

33) 12, S. 517.

34) Vgl. 12, S. 575.

35) Vgl. 18, S. 231.

36) Vgl. 14, S. 1479.

37) 拙稿　前掲論文　111ページ以下参照。

38) Vgl. 12, S. 534.

39) Vgl. 18, S. 231.

40) 12, S. 556.

41) Wolfgang Fritz Haug: Bestimmte Negation〉 Das umwerfende Einverstandnis des braven Soldaten Schwejk〈 und andere Aufsätze. Frankfurt am Main 1973, S. 89.